

# 県立図書館だより

平成27年10月

青森県立図書館報 第23号

## 貴重な資料を気軽に利用 青森県立図書館デジタルアーカイブ 公開

青森県立図書館では、平成27年9月14日にウェブサイト [青森県立図書館デジタルアーカイブ](#) を公開しました。

このサイトは、当館所蔵資料のうち、写真・古典籍などの電子化された貴重な資料を利用することができるものです。パソコンやスマートフォン、タブレットなどの端末からご利用になれます。

利用者登録や利用申請などの手続きは必要ありませんので、お気軽にご利用ください。

どのような写真・古典籍資料が同サイトに掲載されているのかについては、本号6頁「ご存じですか？この資料」にてお伝えしておりますので、そちらもご覧ください。

利用画面例



### 目次

貴重な資料を気軽に利用 青森県立図書館デジタルアーカイブ公開	1
集団読書用図書で読書を楽しみませんか	2
県総合社会教育センターとの連携	2
参考・郷土室からのお知らせ！	3～4
こどものひろば	5
ご存じですか？この資料	6
ようこそ文学館へ！	7
カウンターからひとこと	8

# 集団読書用図書で 読書を楽しみませんか

## 「集団読書用図書」とは

1冊の本を読んで感想を話し合う読書会などで利用してもらうための図書で、全931タイトル、1タイトルにつき10～20冊準備しています。



読書サークルや学校の授業での活用など、集団的な読書活動にぜひ活用してください。

## 利用するには

- 1 最寄りの図書館・公民館図書室等で備え付けの目録からタイトルを選び、申し込みます。
- 2 数日で県立図書館から申し込んだ図書館等に本をお届けします。
- 3 貸出期間は調整可能です。
- 4 返却は借り受けした図書館等をお願いします。

## お隣 県総合社会教育センターとの連携

当館に隣接している「青森県総合社会教育センター」では、本年度、学習スペースや両施設を安全に渡れる横断歩道を整備しました。

利用者の皆さんがより使いやすくなるように、今後も両施設の連携を進めていきます。

敷地内の横断歩道



社教センター学習スペース



# 参考・郷土室からのおしらせ！ 故郷（ふるさと）の話題読み語り 「木活字本！二百年の時を経て」



10月27日から11月9日（文化の日をはさんだ2週間）は、「**読書週間**」です。



そのシンボルマークは「ふくろう」です。

ふくろうは、知恵の象徴としてギリシャ人たちに大切にされていました。学問・技芸・知恵を司る美貌の女神アテナの使者としてギリシャ神話にも描かれ、文化の中心地とされた代表的なポリス「アテネ（アテナイ）」の聖鳥でもありました。

森の奥ふかく、静寂の中で瞑想するかのような「ふくろう」の姿こそシンボルマークにふさわしいと「読書週間」でも使われてきたものです。また、読書週間の初日にあたる10月27日は「**文字・活字文化の日**」としても制定されています。

さて、今回のご質問は、印刷と活字についてです。

## 【質問】

印刷の歴史は古く、日本でも活字による印刷が江戸期からあると聞きました。どのようなものですか。また、青森県でも活字による印刷がその頃から行われていたのですか。

「文字・活字文化の日」の活字というのは、活字そのものではなく広く印刷のことを指します。人類の、文字とそれを記録してきた歴史はエジプトのヒエログリフなど太古よりあります。

印刷の歴史は古く、制作年代が明確な印刷物としては、8世紀の日本の百万塔陀羅尼（ひやくまんとうだらに）が世界で最も古いものとして知られています。



百万塔



「〔百万塔陀羅尼〕（ひやくまんとうだらに）」  
神護景雲4(770)刊 3葉3基 自心印 5.7×46.5cm  
相輪 5.5×39.7cm 根本 5.5×55.0cm 小塔高さ 21.4cm

国立国会図書館電子展示会  
「デジタル貴重書展」  
国立国会図書館所蔵資料の  
デジタル画像より

経文を彫った木版で大量印刷すると木版が磨耗するため、1つの木版では不可能です。複数の版木を彫ったと考えられますが、銅版に文字を鑄造して印刷したのではないかという説もあり、その印刷方法については現在にいたっても判っていないそうです。

版の謎はありますが、日本での印刷のはじまりはとても古いことがわかります。

では、活字による印刷はどうでしょう。

活字の印刷（活版印刷）というと、グーテンベルクの活版印刷を思い浮かべるのではないのでしょうか。発明者としてのグーテンベルクの名前と印刷物である聖書で知られる活版印刷は、金属活字を用いた印刷での、活字を造りやすい金属と生産性の高い鑄造技術や印刷機という西洋式の技術の発明のことです。

活字の発明自体は非常に早く、木製や陶製の活字が中国で造られたのがはじまりです。

11世紀の中国では、活字（陶製）を並べた組版の印刷が既に行われ、13世紀には金属（銅）活字が高麗（朝鮮半島）で造られていました。

日本にも木製や陶製の活字につづき、金属活字と印刷技術が伝わってきます。

イエズス会によって16世紀末ころから印刷されたキリシタン版（キリシタン バン）と呼ばれる印刷物は、グーテンベルクが發明した西洋式の印刷技法が使われたものです。

また、ヨーロッパからの伝来とは別に、朝鮮からも金属活字が伝えられています。

豊臣秀吉が1592年の文禄の役（朝鮮では壬辰の乱と呼ぶ）で持ち帰った銅活字と印刷のための資機材一式です。

江戸時代になり、徳川家康は幕藩体制の強化のために儒教を官学とし、配下の武士階級を学ばせる文教政策に力を注ぎます。そのために木活字の「伏見版」、銅活字の「駿河版」と書物がつくられます。1600年台初頭の事です。



『貞観政要（じょうがんせいよう）』  
家康が木活字で出版させた伏見版



『群書治要（ぐんしょちよう）』  
家康が銅活字で出版させた駿河版

国立公文書館所蔵  
デジタルアーカイブ公開  
資料から

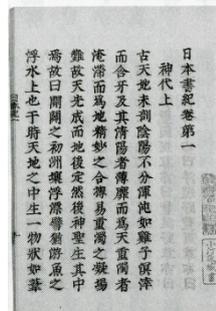
江戸時代、各藩でも出版をしていました。津軽藩も、四代藩主信政の治世（1656-1710）に木活字を使った出版をしていたと云われています。伝本は少なく、津軽藩版木活字本として『日本書紀』神代上下巻が『古活字版の研究 中巻 補訂篇』（川瀬一馬著 日本古書籍商協会 1967）で書影とともに採録・掲載されています。

地方の藩でも用いられるようになった木活字ですが、17世紀中頃からは木版印刷に戻ってしまいます。欧文とは異なり、漢字ではとても多くの活字を必要とし、文選（ぶんせん；文章のとおり活字を順に拾い、箱に納めること。採字とも。）組版作業が大変だったためと云われています。

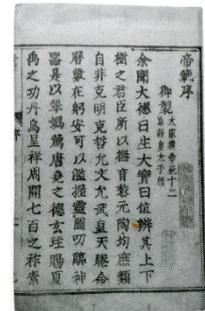
ところが、一端姿を消した木活字が再び世に出てきます。

1796（寛政8）年に創設された藩校「稽古館」で出版された書物（稽古館本と呼ばれています。）の中に、木活字を使用したものがあります。1810（文化8）年刊『禮記』、1811（文化9）年『帝範臣軌』などです。

しかも、それらに使われた木活字は、信政の時代に造られた木活字だということです。どのように伝来利用されたのか、その経緯は不明ですが、江戸時代初期に製造された活字が約200年の時を経た文化年間には藩校「稽古館」で保管していて、再び利用されていたということになります。



『日本書紀』  
津軽藩刊本



『帝範（ていはん）』  
稽古館刊本

文化・歴史を伝え残していく文字・活字自体にも長い歴史があります。「文字・活字文化の日」、そして「読書週間」に、そんな悠久の歴史を感じながら本を手にとってみませんか。

- 【参考文献】『歴史の文字 記載・活字・活版』西野嘉章編 東京大学総合研究博物館 1996  
「津軽藩版木活字本『日本書紀』神代上下巻」山城喜憲著  
（『日本古書通信』2010年11月号（通巻976号） 日本古書通信社）  
『本の歴史』ブリュノ・ブラセル著 荒俣宏監修 創元社 1998 他

- レファレンス申込み及び問い合わせ先  
青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311 FAX 017-762-1757  
電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

# こどものひろば



## 『不思議の国のアリス』出版から150周年

1862年、英国。

川下りを楽しんでいた三姉妹は、ボートをこぐ青年に「ねえ、おはなしをして」とおねだりをします。「でも、おもしろくなくちゃだめよ!」。青年は困りつつも、いつもの様に即興でおはなしを紡ぎ出します。それは、姉妹の次女アリスが主人公となって不思議な国をゆく物語。少女たちは、魔法をかけられたようにその物語に心を奪われていきました。

別れ際、この物語を書き留めて欲しい、と次女に頼まれた青年は、自身が描いた挿絵とともに2年がかりで物語を完成させ、彼女に贈りました。本に仕立てられた物語の表紙には、こう書かれていました。

### 『地下の国のアリス』。

青年の名前は、チャールズ・ラトウィジ・ドッドソン(ドジソンとも)。後にルイス・キャロルと名乗ることとなる彼と、今や世界中に知られた永遠の少女アリスの物語は、ここから始まりました。

さて、『地下の国のアリス』が『不思議の国のアリス』として出版されたのは、1865年のこと。2015年は、その出版からちょうど150年目にあたります。

白いウサギを追って、深い深い穴の中に落ちこちてしまったアリス。辿り着いた先は、哲学的なイモムシ、神出鬼没のチェシャ猫、おかしなお茶会の帽子屋、すぐに首をはねたがるハートの女王、泣いてばかりのにせウミガメといった、おかしな住民たちばかりの不思議な国。アリスは無事に元の世界に戻ることができるでしょうか…。

たった一人の少女のために作られた「不思議の国」は、全ての少女たちの物語となったばかりではなく、瞬く間に世界中の人々を惹きつけ、虜にしていきました。

続編である『鏡の国のアリス』とともに、永く愛されてきたアリスの世界は、アーサー・ラッカムやアンソニー・ブラウン、トーベ・ヤンソンなど、多くの画家たちに描かれてきました。青森県出身の版画家、棟方志功も、『鏡の国のアリス』の挿絵を手掛けているんですよ!

心の中に住むアリスの姿は人それぞれ。この機会に、お子さんと、自分だけのお気に入りのアリスを探してみたいはいかがでしょうか。



左図は、『地下の国のアリス』で、キャロル自身が描いた「にせウミガメ」。鎧を着たラッコのようなユニークな姿です。

右図は、『不思議の国のアリス』に最初に挿絵をつけたジョン・テニエル画の「にせウミガメ」。『アリス』の挿絵については、キャロルからかなり詳細な指示があったと言われていますが、そのためか、テニエルは『アリス』発行後、一切、挿絵の仕事を引き受けなかったのだとか…。





本号1頁で既にお伝えしたとおり、当館では平成27年9月14日から、[青森県立図書館デジタルアーカイブ](#)と称したウェブサイトを公開しております。

本稿では、同サイトに掲載されている古典籍資料のうち『だいにほんこくとうさんどうむつしゅうえきろず大日本国東山道陸奥州駅路図』と写真から『青森堤橋』をご紹介します。

だいにほんこくとうさんどうむつしゅうえきろず  
[『大日本国東山道陸奥州駅路図』](#)

東山道のうち福島県（白河）から宮城県・岩手県・青森県を経て、北海道松前に至る地域の俯瞰図を巻物にしたものです。

上巻・中巻・下巻の三巻からなるこの資料は、山河や民家が色鮮やかに描かれており、描写の緻密さも相まって、当時の様子を伝える貴重な歴史的風景図とされています。

図中には「大間湊」「下風呂村」「田名部市」といった表記を見ることができますので、現在の風景と見比べながらご覧になるのも一興でしょう。

[『青森堤橋』](#)

サイトでは、明治時代の青森県内の様子を撮影した写真を複数掲載しておりますが、それらのなかでも、とりわけ美しい一枚です。

絵葉書に出来そうなこの一枚は、当時の堤橋のみならず、周辺の家屋や往来する人々の様子をも伝えてくれます。

これらの他にも、初等数学から図形解析まで問答式にまとめた『すうがくたんき数学端記』や弘前市出身の探検家・政治家・実業家であるささもりぎすけ笹森儀助氏(1845～1915)が遺した、当時日本の辺境とされた地域の記録を記した『なんとうたんけん南島探験 いちみょうりゅうきゆうまんゆうき一名琉球漫遊記 乙第1号』他など、貴重な資料を多数掲載しております。

これらの資料は、普段目にする機会があまりないと思われるので、これを機に、是非ご覧ください。

---

青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様に広くご利用いただいております。

## ようこそ文学館へ！

### 近代文学館資料の紹介(第22回)

青森県近代文学館では企画展「戦後—青森文学と青森の復興」を10月24日(土)から12月13日(日)まで開催します。展示品の中から2つご紹介します。

#### 抑圧されていた日本の文化が一気に花開いた戦後

##### 石坂洋次郎自筆原稿「続石中先生行状記」



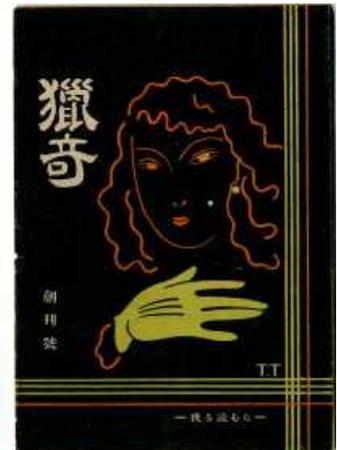
いしざかようじろう  
石坂洋次郎の戦後の新聞小説「青い山脈」は爆発的なヒット作となりました。「石中先生行状記」シリーズはこれに次ぐ新聞小説第2弾です。疎開をきっかけに、戦後も弘前で執筆生活を送り、当時の生活の中から、「人生の経験を多少積んだ大人の目で生れ育った郷里の風土や習俗を見直して書き上げた」作品です。発表当時、内容が猥褻罪に問われた号(後に不起訴処分となる)もあり、話題性の高かった作品です。写真は「小説新潮」(昭和25年6月号)に掲載された「続石中先生行状記 無銭旅行の巻」原稿です。紙が貴重だった当時、反故紙の裏面を利用している事にも注目です。

##### カストリ雑誌の数々

GHQ占領下、ヤミ市、パンパン、カストリ焼酎に象徴される大衆の世界は出版界にも拡がりを見せます。



しかし敗戦によって、中国・朝鮮にあったパルプ・製紙工場を失った日本は、極度の紙不足の状態にありました。そこで、統制外の粗悪な仙花紙やざら紙を利用した、内容も本体も薄っぺらな「カストリ雑誌」が多数刊行されては消えていきます。いわゆるエロ・グロ系雑誌も多く、読み捨てられることが多かったこれらの雑誌は残存部数が少なく大変貴重です。



# カウンターからひとこと(第22回)



「特に借りる本は決めてないけど、県立図書館に行ってみよう」と思いながら来館したことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

今回は、そのような方にもご利用いただきたい“ミニ展示”を紹介します。

## ミニ展示ってなに？

県立図書館には約 86 万冊の本があります。

その中には、魅力的なのにあまり読まれていない、書庫に保管されているなど、日の目を見ることなく本棚に埋もれている本がたくさんあります。

そこで、「実はこんなに魅力的な本がありますよ」と様々な形で本の紹介をしています。これを“ミニ展示”と呼んでいます。

## どんな本を紹介しているの？

一般閲覧室貸出カウンターの隣に 2 種類のミニ展示コーナーを設けています。

まずは、ある特定のテーマに沿った本を紹介する「ミニテーマ展示」コーナーです。

その時々、季節や話題に関する本を中心に紹介しています。

次に、職員が“ぜひ読んでもらいたい”という本を個性豊かなポップで紹介する「職員おすすめ」コーナーです。

職員の趣味や関心事が伺えるバリエーションに富んだ展示となっています。

ミニ展示は期間が決まっていません。また、展示している本は次々と新しいものになるので、同じ本が再び展示されることは稀です。

来館する度に、その時だけの本との出会いを楽しんでください。



↑「ミニテーマ展示」コーナー



↑「職員おすすめ」コーナー

ほかにも、一般閲覧室には、青森県近代文学館や青森県立郷土館などの企画展開催中に関連する本を紹介するコーナーもあります。

また、参考・郷土室と児童閲覧室にもそれぞれ多彩な展示コーナーがあります。是非お立ち寄りください。